

相談屋の少女

ルミナス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『妖怪相談屋』という、妖怪達と『あり得ないものが見える人達』の相談を請け負う家。その家に産まれた一人の少女は妖怪の事が大好きだった。

そんな少女と、友人帳を持つ少年、そして、その周りにいる人達のお話。

目次

プロローグ	1
第一話	4
第二話（上）	9
第二話（下）	14
第三話（上）	21
第三話（下）	25

プロローグ

ある教室にいる少女は、普通の人とは違う所がある。
見た目は黒髪の長髪でセーラー服と何処にでもいる普通の少女。
しかし、彼女には、普通の人には視ることが叶わない『妖怪』と言われる類の者が視える。

その事を知っている者は一部の者だけだが。
そんな彼女がいる教室に、転校生が一人やって来た。
名前は『夏目 貴志』。ひよろい体型をした男性だ。
しかし、彼女には『夏目』という名前に聞き覚えがあった。

(『夏目』……何処かで……あ、そう言えば『鈴』が言つてた様な気が……)

夏目という少年は、彼女から見て斜め左前に座った。
その少女はその日、夏目を暴露ない様に観察したのだった。

「ただいま〜」

学校が終わり、彼女は自身の家に帰って来た。

夏目を観察して見た結果、彼は確実に『妖怪』が視える人間だ。

彼女はそう考えながらも家に上がれば、一人……いや、一匹の猫の様な『妖怪』が寄って来た。

「お帰り、『さやか』」

「ただいま、『鈴』」

この少女、『三日月 さやか』は、自身の友人であり、先祖代々使えてきている式神にも似た妖怪、『鈴』こと『霊姫』に挨拶をした。

『霊姫』

この妖怪を簡単に説明すれば、一行で済む。

霊力、妖力、神力……つまりは全ての力をつかさどる妖怪だ。
神様と考えても差し支えの無い妖怪である。

今、彼女の見た目は薄紫色の猫又の様な妖怪。しかし、その額に紅い宝石の様な何かが付いている。その上、首には赤い首輪に鈴が付いている。尻尾と額の物さえ気にしなければ何処から見ても猫である。

「……と、言うわけだけど、どう思う？・鈴」

「確実に『夏目 レイコ』の孫でしょうね。見た目の特徴とか聞いたらもう確定だし」

鈴は猫の座り方と同じ座り方をしながら話をした。

貴志を見ずともこう断言するなら、確実なのだろう。

「まあ、彼の態度からして、妖怪の事を快く思っていないのは明らかなんだよね……」

「貴女みたいに快く思う方が珍しいと思うけどね」

「霊夢みたいに『無関心』なのも珍しいけど？」

「あの子は巫女だからでしょ。それから、魔理沙だったかしら？みたいに好奇心旺盛な子も珍しいけどね」

「確かに。『視えない人』が彼処まで興味津々なのは珍しいよね……つと、話が逸れてる」

さやかはその言葉を聞き、少し咳をし、鈴は話をし始めた。

「兎も角、その彼がもし『友人帳』を受け継いでいたのなら、大変な目に会うのはもう確定ね。どうする？・さやか」

「どうするって、決まってるよ」

さやかはそう言いながら、鈴の目を見て、意思を伝える。

「夏目君を助ける。鈴の話だと『友人帳』を妖怪に奪われたなら大変みたいだしね。それに、知った事実から目を逸らすのは、自分にとつて都合が悪い時だけで十分だからね」

「……それも駄目だと思うのだけど？」

鈴は少し呆れた様子を見せながら喋った。

「まあ、最後のは冗談だとしても、夏目君の身の危険を知っているながら見過ごすのは私の『仕事』柄無理だし、そもそも、性格の問題でも無理だしね。と言うことで……」

さやかはそう言いながらポーチを開け、其処から一枚の鳥型の紙を出した。

「……行け!!？」

その合図と共に鳥型の式神は開いた窓から外へと出て行った。

「まあ、流石に夜に外に出る事は無いだろうけど、『もしも』があつた

「不味いしね」

「そうね。さて、それじゃあ、お風呂の用意をして来ましょう。少し待ってて頂戴」

鈴はそう言うと、その部屋から出て行ったのだった。

「それじゃあ、私は自室で宿題でも済ませますか」

さやかはそう言うと、自室の方へと足を向けるのだった。

第一話

さやかはいつも通りに学校に行き、いつも通りの日常を送る。

しかし、少し違うのは、其処に『夏目貴志』の観察が入った事だろう。

(というか、これって私がまるで『ストーカー』してるみたいじゃない!!?)

そう考え、気持ちが悪えそうになるのを必死に耐えたさやかはお昼の時間となると決まってある場所に行く。

それはこの学校の屋上である。

そして、屋上への扉を開けば、そこには四人の女の子が居た。

一人は黒髪の長髪で紅い大きなリボンを着けた女の子。

一人は少しこの地域では珍しい金髪の長髪の女の子。

一人は同じく金髪で、此方は短く、カチューシャを着けた人形のような女の子。

そして、最後の一人は金髪よりも珍しい、白髪の短髪で黒のリボンを着けた女の子。

この四人とさやかは友人の関係に当たる。

「やつほ〜!」

「あら? やつと来たわね。 さやか」

「遅いぜ!!? さやか!!?」

「また『妖怪』にでも襲われたのかしら?」

「さやかさんなら妖怪に襲われても、お札なり殴るなり蹴るなりで退治出来るでしょうがね」

「私そんな暴力的な女子じゃないよ!!?」

そんな会話をしながらもの四人に混ざるさやか。

「それで? 結局遅れた理由は何よ?」

「ほら、霊夢と妖夢には連絡入れたでしょ? 『夏目貴志』って男子のこと」

「あ、さやかが一目惚れして、挙句ストッキングしてる相手ね」

「凄く語弊があるけどやってる事がそれっぽいから言い返せない」

「た、確か、その人も『妖』が視えてるんでしたね」

白髪の少女、妖夢が会話を軌道修正するためにそう言うと、さやかは頷いた。

「へ〜！其奴も視えるのか!!？ちよつと話を聞いてみたいぜ!!？」

「止めときなさい、魔理沙。さやかはそんな子じゃなかったけど、だからって視える人全員が話してくれることでもないわよ」

「アリスの言う通りだよ。それに見た限りだけど、多分、妖怪に対して良い印象を抱いてないよ」

「まあ、でしょうね。普通の人にとって『視える人』は異物の対象ではないもの」

「アリス、それは言い方が酷すぎるぜ？」

「けど、本当の事でしよう？」

金髪の髪の子達、アリスと魔理沙が口論じみた事をしてっていると、それをさやかは止めた。

「まあまあ、兎も角さ、食べながら話さない？今の時間はお昼だし、霊夢なんて黙々と食べてるし」

そう言いながらさやかは紅リボンの女の子、霊夢を見た。

全員も其方に目を向けると、確かに霊夢は黙々とお弁当を食べていた。

「はあく、この中で視える奴である霊夢は何でそんな興味無しで食べてられるんだよ」

「正直、私には関係無いもの。あと、そういうタイプは面倒臭い事を持つてる奴だからよ。しかも、今回は絶対持つてるでしょうし」

「何でそう思うんだよ？」

「いつも言ってるじゃない。ただの『勘』よ」

霊夢がそう言うと、四人は「当たるな」と考えた。

この四人だけでなく、彼女と関わったことがある者は知っている事実だが、彼女の勘は100%の確率で当たるのだ。

それで一度会話を切り上げ、お弁当を食べる事に集中し、食べ終わった頃にはチャイムがなつてしまった。

その為、彼女達は其処で別れる事になった。

そして放課後。また霊夢達と集まり、少し話していると突然、彼女が放った式神からの連絡が来た。

「!!?」

「?さやか?」

一早く様子が違う事に気付いたアリスはさやかに何があつたのかと聞こうとしたが、本人から「また明日!!?」と言われた挙句に走って何処かへと行ってしまった為、聞こうにも聞けなくなってしまったのだった。

「はあ、夏目関係ね。絶対」

一人霊夢は勘付いていたが。

式神がいる場所へと来てみれば、夏目が丁度、白い獣の妖怪に襲われてる所だった。

さやかは素早くポーチの中からお札を出し、投げ付けようと構えるが、彼女にとつての予想外が起こった。

夏目がその獣を殴りつけたのだ。

足で丁度体を抑えられていた状態のまま。

(え!??い、いや、まあ、力が強い人は普通に殴れるけども!??私も霊夢も妖夢も出来るけども!!?あんなひよろい体型で!??)

さやかがその頭の中で思っていると、夏目と白い獣が一言二言話したかと思えば、白い獣は白饅頭に変わり、そのまま夏目と移動していった。

(あの招き猫はきつと『依り代』なんでしょうね。でも、依り代なんている程に力が弱い妖怪にも見えなかった……なんで?)

さやかが一抹の疑問を覚えながらも後をつけてみると、なんか女っぽい妖怪に黒い蛇の様なものが出ていく瞬間を見た。

(夏目君が持つてるあの帳面がきつと鈴が言っていた『友人帳』。なら、あの黒い蛇の様なもの『名前』?)

さやかが思考をしていると、また移動し始めた夏目と妖怪。

さやかはそれに気付き、またもや後をつけてみると、こんどは一目のお婆さんのような妖と対面していた。

「我を護りし者よ。その名を示せ」

(……)

さやかは成り行きを見守っていると、帳面が一枚の紙を示した。それを夏目は躊躇なく千切り、そのまま口に咥え、ふっと息を吐くと、またあの黒い蛇の様なものが妖怪へと帰っていった。

それから少しすると、惚けていた夏目と招き猫が一言二言話し始めた。

(……これは、私の出番はないかな？あゝあ、折角視える者同士、仲良くなれると思っただけで、後回しだね)

そう思いその場を去ろうとしたが……、

「所で……さつきから其処の茂みに居る奴。さつきと出て来い」

(!?!?)

招き猫からの言葉が耳に入ってきた為に、動けなくなってしまうた。

「え？そ、其処に誰か居るのか!?!?」

夏目は何処か焦った声を上げた。

きつと、視えない者に見られたと思っただろう。

さやかは小さく溜息を吐くと、茂みから出て行った。

「こんにちは、夏目君。一応は初対面だね」

「き、君は……う？」

「私は三日月さやか。貴方と同じクラスメイトだよ。よろしくね？」

そう言っって手を出すと、夏目は戸惑った様子を見せた。

「?どうしたの?」

「い、いや……怖く、ないのか?」

「は?」

「いや、だから……」

「ああ、もしかして貴方の行動?なら安心して良いよ。私も貴方と同じで『視える』からや」

「え?」

夏目は今度は驚いた様な表情を見せた。

「おい小娘。今、お前『三日月』と言ったか?」

「ん？言ったよ？」

さやかがそう言うと、招き猫は「ほう……」と言っただけで先を言わなかった。

「？まあいいや。まあ、そういう事だから、今後ともよろしくね、夏目君？」

さやかはそう言うと、お茶目にウィンクするのだった。

第二話（上）

夏目と一応の初対面を終えた次の日。

さやかが教室に入ると、夏目と最初に目が合った。

「おはよう、夏目君」

「あ、ああ、おはよう」

さやかは笑みを浮かべて挨拶をし、返ってきた挨拶を聞くと席に着いた。

そして、夏目はというと、

「夏目!!? お前、三日月さんと何時仲良くなったんだ!!?」

「いや、何時って……昨日だが?」

と、こんな感じの会話をしていた。

そして、その日のお昼。

「……と、まあそんな事が昨日あったのよ」

さやかは昨日の事を何時もの四人に説明すると、魔理沙は目を輝かせながら言った。

「やっぱり其奴も妖怪が視えるんだな!!? あく、私も見たいぜ!!?」

「その好奇心で視えたら、きつと後悔するわよ」

「あれ? アリスは視えないんじゃない?」

「ええ、視えないわよ? 視えないけど、どんな気持ちかを想像は出来るでしょ?」

アリスはそう言うと、食べ物をお口に含め、食べ始めた。

「そうですね。私は視える人ですけど、小さな頃は余り良い想いは持っていないでしたね……」

妖夢はそう言うと、過去を振り返る様に明後日の方向に顔を向けた。

「私は別にどうとも感じて無かったけどね。まあ、強いて言えば……」

霊夢がその先を言おうとすると、何かの羽音が聞こえてきた。

「こんにちはー!!? 情報屋の『射命丸 文』です!!?」

「……こんな風に上位の妖怪が好き勝手に神社とかにやって来ることを遺憾に思うぐらいかしら!!?」

霊夢はそう言うと、ポケットの中に隠し持っていたお札を投げ付けた。

しかし、文はそれを羽を羽ばたかせ、風を起こす事によって当たる事を防いだ。

「あやや、怖い事はやめて下さいよ、霊夢さん」

「うっさい、嘘情報売りつけてくるぼったくり鴉天狗が」

「嘘情報なんて売ったことが無いですね。何せ、情報はとても曖昧なもの。嘘か本当かは私でも分かりませんよ」

「ふん」

霊夢は文のその回答が不満だったのか座り直し、弁当を食べ始めた。

因みに、視えてない組からしたら、霊夢の行動は奇行に見えたのだった。

しかし、お札を構えた時点で妖怪がその場にいると分かったので良かったとしよう。

「それで、文はどうして此処に？」

「いえ実はですね、此処にあの『夏目 レイコ』の孫がいると言う情報を掴んだので取材に……」

「人間の迷惑だし、その孫にとつても迷惑だから今すぐ帰れ」

「あやや！私の扱いが酷いですね。まあ、今日の所は引き下がるとしましょう。それでは！」

文はそう言うと、自身の黒い羽を羽ばたかせ、また飛んで行ったのだった。

「……さて、お昼の時間が押してるから、此処は食べる事に集中しようか」

さやかはその言葉を聞くと、全員食べる事に集中するのだった。

時間が過ぎ、既に放課後。

さやかも霊夢達と一緒に帰る為に準備をしていると、夏目から話し掛けてきた。

「なあ？今日、家に寄ってかないか？」

「?夏目君の家に?良いの?」

「塔子さん達にもちやんと説明するから大丈夫だ」

さやかはそれに対してどうしようか?と悩んでいると、教室の扉が開いた。

「はく、本当にあの先生の頭突きは痛いよな」

「寝てる魔理沙が悪いのよ」

「さやかさん、遅れて申し訳ありません」

「ほら、帰るわよ……って、あら?」

霊夢はそこでさやかの近くに居た夏目を発見し、何かに勘付いた。

「あ、やっぱ良いや。ほら、全員帰るわよ」

「はあ?おい、さやかは……」

「さやかは別の用事が出来たみたいよ」

「あら?それなら仕方がないわね。さやか、また今度一緒に帰りましょう?バイバイ」

「それでは、失礼しました」

妖夢が最後に礼儀正しくすると、教室の扉を閉めた。

「えつと、ごめんな?」

「あ、気にしなくて良いよ。それじゃあ、行こうか」

それを聞くと、夏目はさやかと共に帰って行った。

そして今現在、夏目が居候している家、『藤原家』へとやって来て、夏目の部屋に上がっている。

「……それで、何か聞きたい事があるから連れてきたんでしょ?」

「あ、ああ……」

夏目は何か緊張した様子でそう零すと、小さく深呼吸してから質問した。

「君は、『視える』のか?」

「ええ、ハッキリ、くつきりとね。というか、それは昨日、分かったと思うってたけど……」

「いや、招き猫の状態の先生は見えて当然みたいだから……」

「?じゃあ、何でこんな危ない橋を渡るような真似を?」

さやかからの質問に、夏目は視線だけニャンコ先生に向けた。

「それは私が教えたからだ」

「貴方が?というか、貴方はどんな妖怪?」

「なんだ?三日月家の者なのに分からぬのか?」

ニャンコ先生からのその言葉にムツときたようで、頭の中に入っている妖怪辞典を開き、探した。

そして、そっくりな姿の妖怪を見つけられる事が出来た。

「……『斑』?」

「正解だ」

ニャンコ先生改め、斑からのその言葉を聞くと、胸を撫で下ろしたさやか。

そして夏目の方に視線を向けると、何かに驚いた様な顔をしていった。

「?どうしたの?」

「いや、凄いなと思つて……」

「そう?これぐらいなら普通に出来るけど……」

その後も少し話した後、さやかは藤原家を後にした。

そして、その日からさやかは度々、藤原家で夕食を食べる様になつていったのだった。

その数日後の夜。

「いや、それにしても……帰つてる途中に襲われるなんて災難だね」

さやかは苦笑い気味にそう言った。

それに対して夏目は本当にぐったりした様子で小さく頷いた。

そして、ニャンコ先生で遊んでいると、

「二人とも、ご飯よ〜!」

下から塔子の声が聞こえてきたため、二人とニャンコ先生は下へと降りていった。

「うわ〜!このトンカツ、美味しそうですね!!?」

「ふふ、有難うね」

さやかは塔子とそんな話をしていると、右隣に座っていた夏目がイ

キナリ吹き出した為、それに驚いたのだった。

「えっと、『露神』様……ですわね？」

「おお、流石は三日月家の者じゃな。当たり前じゃ」

『露神』様？」

夏目はさやかからの言葉に疑問符を付けて返してきた。

「うん、この妖怪は神様なんだよ」

「妖怪なのに神様ね」

「それにしても、お前さん、本当にあのツユカミのじじいか？」

「そうじゃ。それにしてもその声……お前、斑か？ははっ、何だお前さん、そのふざけた態は」

「うるさいぞ爺さん」

そんなちよつとしたコントを見て軽く笑っていたさやかだった。

しかし、事態は急変する。

夏目がツユカミに名前を返そうとしたが、何故かもう一枚の紙と引っ付いていて無理だった。

引っ付いている理由は米粒が付いていたようで、『レイコはずぼらだったから、飯を食いながら弄ったんだろう』との事。

当然、剥がそうと試みるが、その所為でツユカミが痛がりだし、結局、一緒に返すしかない判断されたのだった。

それをさやかは帰ってから鈴に話した。

「ふくん、まあ、確かにそれしか方法は無いわね」

「でしょ？まあ、これで夏目君の疲労困憊は確実に変わったね」

「そう言えば、ツユカミは知らないの？」

「いや、知ってるみたいだから明日聞きに行くんだよ」

「あら？そうなの。なら、私も明日行ってみようかしら？」

「あれ？珍しいね。鈴がそう言うなんて」

「ふふ、久方振りの友人に会うだけよ」

鈴はそう言って笑うのだった。

第二話（下）

ツユカミと邂逅した次の日、さやかは鈴と夏目とニャンコ先生と共に七つ森に向かっていた。

さやかは特に気にしていなかったが、鈴の存在を知らない夏目は、それを質問してきた。

「なあ？三日月。その妖怪は？」

「この子は鈴。うちの用心棒よ」

「大昔に、さやかの先祖と契約して、今は用心棒のような事をしてるわ」

「ほう？で、対価は？」

『精神』。月一にはげつそりとした顔の私が見れるわよ、夏目君」

さやかからのその言葉に、夏目はあからさまに顔を顰めた。

「対価って……」

「契約時になんのリスクもなく出来ると思わない事ね。貴方達人間も、何かと契約すればそれ相応のお金を支払ってるんじゃないかしら？それと同じよ」

「だけど、それは三日月が危ない……」

「私がそんなヘマをするわけが無いでしょう？精神力をもらってるっただけで、其処まで危なくないわ」

「そうそう。それに、其処は自己責任だしね」

「……そうか。それにしても、こっちに來るのは初めてだな。三日月は？」

「何度も來てるけど、さすがに祠があったなんて気付かなかった……？」

と、その言葉の途中で足元に桃が転がってきたのに気付いたさやか達は歩みを止めた。

「あらら、桃、落ちましたよ」

そう言いながらさやかは桃を拾い、それを落としたお婆さんに向けた。

「大丈夫ですか？」

夏日もそう言いながら桃を向けると、お婆さんは優しそうな笑顔を浮かべていた。

「あらあら、ご親切にどうも。痛んでなければもらってくださいな。一人では食べきれなくて」

「え、でも……」

「良いの良いの」

「あ、ありがとうございます」

さやかはお礼を言いながら頭を下げると、お婆さんはどういたしましと返してくれた。

「今日は良いお天気ですね」

「そうですね」

「青空ですからね。入道雲もないですから、雨は無さそうですね」

「あら、雨がお好きなの？」

「青空も雨も好きですよ」

「そう、良かったわ」

お婆さんは嬉しそうにそう言うと、さやか達の前から去って行ったのだった。

さやかはお婆さんが見えなくなるまで見てから進もうとすると、其処には驚いた顔をしている夏目がいた。

「?どうしたの?」

「い、いや、俺と違って結構話せてたなって……」

「私にも友達がいるからね。その子達とよく話してるから、コミュニケーション能力はあるわ」

「友達って、この前教室に来た……」

「そ、あの子達」

そう言って進もうとすると、鈴がお婆さんの方を見ていることに気付いた。

「鈴?どうしたの?」

「ほう、お前さんも気付いたか」

「ええ」

「☒」

さやかと夏目は何のことか分からず、首を傾げると、ニャンコ先生が簡単に言ってくれた。

「あのばあさん、そう長くないな」

「は？」

「あまり美味そうな匂いじゃ無かった」

「先生って、やっぱり人を食べる系の妖怪なのか？」

「当然よ。斑という妖怪は人も食べるわよ」

さやかの答えを聞いた夏目は、今後気をつけることを心に刻んだのだった。

七つ森にある祠まで来てみると、夏目の顔はサツと青褪めた。

「！祠に住んでるって……あんた神様だったのか!?!?（やばい、祟られる……!）」

その時、夏目の脳裏に浮かぶは昨夜の事。

自身が寝ている布団の上で酒を飲みながら騒がしくするツユカミとニャンコ先生。

その後、「中年妖怪共！」などと言いながら外へとポイ捨てしたと。

（……つつうかレイコさん、なんて罰当たりな……）

「?どうしたのじゃ?夏目殿」

「お前さんが神様と知って昨夜の事を思い出したのじゃろ」

「?昨夜?」

「いやいや、そう呼ばれているが元は祠に住み着いた宿無しの物怪だよ」

「ツユカミの由来は昨日、勉強してきたわ。」

——ある早魃の時、村人が七つ森にある祠に祈った。すると、次の日には雨が降り、早魃から人々を救った

私の家の書物にはそう書いてあったわ」

「そうじゃ。偶々雨が降って、それ以降、私は『露神』と呼ばれるようになり、供物もどっさり置いていくようになった。気付くと私は力に溢れ、姿もみるみる立派になった」

「前見たときは人間くらいの大きさだったわよね？」

「私とレイコがあつた時もその位だったな」

「あの頃はな。今では殆ど人足も途絶えた。信仰で膨らんだ体は信仰が薄れるにつれて縮んだというわけさ」

「まあ、神様はそういうものよね」

さやかがその時に思い浮かべたのは、緑髪の巫女。

霊夢経由で知り合った巫女で、その巫女が務める神社にも神が二柱いるが、その神の力も、信仰が無ければ弱い。

霊夢の神社も思い浮かべたが、彼処には神さえいなかったと思い出すと、其処で考えるのを止めた。

そして思考を止めると、いつの間にもやらもう一人の妖の姿を知ってるからと夏目の家に行こうという話になっていたのだった。

その後、ツユカミの絵を見せてもらったがどうにもキュウちゃんにしか見えず、夏目の部屋には爆笑する声が響いた。

その次の日、お昼休みにいつも通りに屋上に来てその話をしたさやか。

「き、キュウちゃんみたいな妖怪って……」

「ま、魔理沙、笑ったら駄目よ……ふふっ」

「アリスさんも笑ってるじゃないですか……ププっ」

「あはは！可笑しい!!？何でキュウちゃんなのよ!!？」

キュウちゃんの話をする、四人は笑ってしまった。

そして、一番に笑い終えたのは妖夢であった。

「それで、そのキュウちゃんみたいな妖怪を探して、名前を返せば終わりということですね」

「そう、それで終わりなんだけど……あの絵を見て、思い浮かぶ妖怪が一匹だけいるわ」

「え？いるのか？」

魔理沙の問いに頷いて返すさやか。

その後ろから、鳥の羽が羽ばたく音が聞こえてきたために見てみると、其処には文がいた。

「どうもー!!? 清く正しい射命丸です!!?」

「あら? 丁度良いじゃない。此奴にキュウちゃんの事を聞けば?」

「ん? なんのお話でしょう?」

文は流石に話についていけずに首を傾げた。

そんな文にキュウちゃんー基、『ススギ』の事を聞くと、笑顔が浮かべた。

「その妖怪なら知ってます。昔、人から食べ物を買って、夜の光源が無い時にその返しをしているのを見たことがありますから。」

それでは! 何か進展がありましたらご連絡しますね!!?」

文はそう言うと、颯爽と飛んで行ってしまった。

「……あ、お弁当」

「……」

しかし、羽ばたいた時に出来た風の勢いで、霊夢達の弁当は無残にも地面に飛ばされ、もう食べれない状態となっていた。

「……絶対に、許さないわよおおお!!? 文ああああ!!?」

屋上には、霊夢のそんな叫びが響いたのだった。

其処からずっと、三ノ塚でススギ(夏目はキュウ太郎と思ってる)探しをするが、全く分からなかった。

(これは文からの情報を待つしかないかな?)

そう思いながら窓の方に顔を向けると、夏目が疲れから寝ている姿が見えた。

(……早く見つけないと、時間がないんだから)

さやかはそう思いながらも本を読み始めた

その日の夜、さやかは家で鈴と話をしていた。

それは、この日の放課後にあった出来事が原因だ。

「……あの『ハナさん』ってお婆さん、昔、視えてたのかな?」

放課後、夏目と共にツユカミの祠まで来てみると、其処にはお婆さんが一人、祠で手を合わせていた。

そのお婆さんは小さな頃からその祠にお参りをしていたようで、女学生の時には、ツユカミの姿まで見たというのだ。

しかし、それ以降から見えていないと言うのだから、『視えた人』という可能性は少ないだろう。

「……昔は、三日月家もツユカミを信仰してたわね」

「え、そうだったの？」

「ええ。ただ、先代から信仰が消えたわ……あの子は、妖怪が嫌いだったからね」

「……」

その言葉でその場に暗い空気が流れた時、玄関扉をノックする音が聞こえてきた。

「!!? 誰だろ? 妖怪退治人なら絶対に返すけど」

そう言っつてその場から立ち上がり、玄関を開けると、そこに居たのはさ文だった。

「文? ……あ、まさか!!?」

「はい!!? 情報が手に入りましたよ!!?」

その言葉に喜びを露わにしたさやかだった。

その次の日、さやかは夏目と共に三ノ塚まで来ていた。

「文の情報とツユカミ様の情報が合致して良かった」

「なあ? その文つて誰だ?」

「機会があれば紹介するから」

そう言いながら周りを警戒していると、背筋に寒気が走った。

「!!? 夏目君、後ろ!!?」

その言葉と共に後ろを見れば、木々の陰に妖怪が居た。

すると、その妖怪は姿を一度消し、今度は地面に出来た木影の中に居た。

「夏目!!? さやか!!? 木陰から出る。此奴は強力な力をもつ。お前達を喰おうとしている」

「こ、こいつがキュウ太郎!!? 字しか合っていないじゃないか!!?」

「そんなこと言っつてないで、早く木陰から出るよ!!?」

そして、出ようとしたところで、後ろで何かを叩く音が聞こえた。

「!!? 先生!!?」

ニャンコ先生が叩かれたのだと分かった夏目はすぐに振り返る。
しかし、その為に逃げる事が出来なくなり、夏目はあつさりとしてスギに捕まる。

「夏目君!!?」

さやかは何も出来ない事を歯がゆく思いながら、手鏡を取り、影から手でススギに光を当てようとしたが、それよりも早くニャンコ先生が払いの光を出し、そのお陰で夏目はススギから解放され、ツユカミと共に名を返した。

しかし、二人同時に返した無茶が祟り、夏目は意識を失ったのだ。た。

「で!!?その後、如何なつたのですか!?!?」

その日から二日後、屋上でいつも通りに弁当を食べていると、文がやって来て話を急かしてきた。

さやかは協力してくれたからと仕方なしに文に話をしている。

「その後、夏目君の意識が戻ったから、一緒にツユカミの祠に行ったのよ。そしたら、ツユカミは前よりももつと小さくなって、そのすぐ後に光りだしたわ」

「おっと、それはもしかして……」

「そう。ツユカミを唯一信仰してたハナさんが亡くなったから、消えようとしてたの」

神は信仰が無くなれば儂く消えてしまう。

ツユカミもまた、例外無く同じである。

ハナさんという信仰してくれていた女性が亡くなり、信仰してくれる者は居なくなつた。

力もなくなり、存在も維持出来なくなつた為に、光出して、消えてしまった。

「……『私の友人』か。最後の最後まで、人間が好きで妖怪だったわね」

「ハナさんと、会えたらいいね、ツユカミ」

弁当を食べながら騒がしく話してる魔理沙達を他所に、そう考えるさやかであつた。

第三話（上）

朝の学校、さやかは自身の教室近くまでやって来ると、そこに珍しい客人がいる事に気付いた。

（?誰だろ……う?）

さやかはその男を見ていると、男はそのまま教室から離れ、さやかがいる方に歩き始めた。

そこで男は突っ立った状態のさやかに気づき、ぺこりと頭を下げて挨拶をしてきた。

それに習い、さやかも挨拶を交わすと、首を傾げて教室の中へと入ろうとすると、西村と夏目が出てきた。

「うわっ!!?」

「え!!?!!、ごめん三日月さん!!?」

「あ、いや、気にしてないから大丈夫だよ……だけど、どうしたの?」

西村は三日月の問いに「いや」と言いながら廊下を見渡すと、首を傾げた。

「今、お前の事を聞かれたんだけどなあ」

「?西村君の知ってる人?」

「ん、あまり見ない顔だったな……」

そう言ってもう一度廊下を見渡してから夏目に顔を向けた。

「悪かったな、起こして」

「いや」

「あ、寝てたのね、夏目君」

「まあな」

「しかしよく寝てるな、夜眠れないのか?何か悩みでも?」

それに対して、夏目は柔らかな笑みを浮かべて否定するのだった。

その日から少し経った日、さやかはいつも通り登校していると、霊夢と鉢合わせした。

「あ、霊夢!おはよう〜!」

「あら、おはよう」

「こんな風に会うのは珍しいね」

「そうね。でも、もっと珍しいものが前にあるわよ?」

その言葉に首を傾げながら前を見ると、夏目が妖怪と共に登校している姿があった。

「……何あれ」

「さあ?少なくとも、襲われてないから何もしないでもいいと思うわよ」

「明日から夏目君は奇妙な人に見られるかも……」

「もう既に見られてるわよ。噂だって流れてるんだから」

そんな霊夢の言葉にさやかかか溜息を吐くと同時に、夏目の『迷惑だ!』と叫ぶ声が聞こえてきたのだった。

その日の授業の間、夏目に纏わりつく一ツ目と牛の妖怪は、とても目立つ行動（視える人には）を夏目の周りですしていた。

（彼奴ら……授業に集中出来ないじゃん!!?）

さやかはその所為でイライラし始め、心を落ち着けるために、休みの時間中は本を読む事にして気を紛らわせていた。

そして、お昼休み、さやかと妖夢は溜息を吐いた。

「どうしたんだ?二人して珍しい溜息を吐くなんて」

魔理沙はお弁当を食べる手を止めて聞くと、妖夢が疲れた顔をして答えた。

「今日の間、ずっと学校の外に二匹の妖怪がいるのですが、その妖怪達に集中を欠かれて……」

「同じく……」

そう言葉にして、再度溜息を吐く二人に、哀れみの気持ちを持ったアリス。

「本当に『視える』というのは良いことばかりじゃないわね」

「で?『視える』組の霊夢はどうだったんだ?」

魔理沙はニヤニヤした顔で弁当を食べ続けている霊夢に聞くと、不機嫌そうな顔で答えた。

「隙を見て札で攻撃したわ」

「だから途中で静かだったのか……」

「おかげで気持ちよく授業中に寝れたわ」

「いや、授業は寝る時間じゃないから!!?」

「これで良く赤点を取らないわよね……素直に感心するわ」

アリスのその言葉に、霊夢は答える。

「そんなもの、勘で何とかなるものよ」

「勘でなんとかはならないけどね普通」

「本当、どうして此奴はこんなに勘が良いんだか」

さやか達はその後、昼休みの後の煩さを想像し、また溜息を吐くのがあった。

その日の放課後、学校から出て歩いていると、途中で夏目があのだ匹の妖怪の前で溜息を吐いてる姿があった。

「……ごめん、私は此処で」

「待ちなさい」

さやかは夏目の方に行こうとすると、それを霊夢が止めた。

「?どうしたの?」

「何でもかんでも突っ込むのは頂けないわ。あつちはあつちの問題。」

さやかは突っ込まなくても良い問題よ」

その言葉を聞いて、さやかは一度逡巡すると、首を横に振った。

「ううん、首を突っ込むよ」

「どうして?」

「だって、夏目君の手助けをしたいと私が思ってるから」

「……はあ」

霊夢はそれに溜息を吐くと、さやか手を離れた。

「なら、手助けしてくるといいわ」

「!!?有難う!!?行つてきます!!?」

そう言つてさやかは夏目の元に走つて行つた。

「……あくあ、こりゃ、彼奴は食べ損ねだな」

「それよりも大事つてことですよ」

「でも、彼処のケーキ屋さんのケーキ、美味しいと評判だからと全員分揃えて買ってきたのに……」

アリスはそう言って、買って来た意味が一つなくなつたと溜息を吐きながら思うと、霊夢は輝く目をアリスに向けた。

「なら、私が余つたものを食べるわ!!?」

「うわ、食い意地が凄いな……だが渡さん!!?余つたケーキは私の物だ!!?」

「いえ私のです!!?」

「残念だけど、お母さんに渡すわ」

「「え〜!?!?」」

それを聞くと、霊夢達は肩を落としたのだった。

第三話（下）

さやかは夏目の元へと走り、手伝いを申し出た。勿論、夏目も最初こそはその申し出を断ったのだが、さやかは「断られても行くからね！」と断言すれば、夏目も断りきれずに申し訳なさそうな顔をしながら八ツ原の森へと入っていった。

「それで？誰を探してるの？」

「ああ……こいつらを祓ってる人がいるらしくて、その人を探してるんだ」

それを聞くと、さやかはあからさまに顔をしかめた。

（退治屋が来てること？……それともただの祓人か。どちらにしろ、妖怪たちに危害を加えるなんて）

さやかはそこまで考え、ふと、周りに多数の妖怪の気配があることに気づいた。それとほぼ同時に妖怪の手が夏目とさやかの足首を捕まえ、転がし、隠れていた妖怪たちが一斉に夏目とさやかを襲い出した。

『人間だ』

『人間がいるぞ』

『おのれ人間め』

『我らを追い出しに来たか』

「ちよっ!? 違うから！ 私達は貴方達を追い出しに来た人間じゃー」

「わ……違……っ……っ……ニヤンコ先生っ」

さやかはなんとか誤解を解こうと言葉を投げかけ、夏目はニヤンコ先生へと助けを求める。しかし、妖怪達はその言葉を聞かず、ニヤンコ先生もまた助けるそぶりはない。

「こら、違うぞ。そのお方はなあ」

そう言っ一つ目の妖怪もまた止めようとするが、しかし妖怪達の猛攻は止まらない。

「小物ばかりだ。そろそろ自分で払えるようになれ。それくらいなら吹き飛ばせる。それかさやかにやってもらえ。そいつも祓えるぞ。」

でも早くしないと鼻の穴や耳から脳を吸われるぞ」

「ヒツ……わっ……わ……わ……！やめろ、セクハラ妖怪共々っ！」

「ちよっ!?夏目君！ボケてる場合じゃないから!」

さやかは妖怪達の猛攻の中、なんとか自身のポケットに入ってる紙を取り出し、使おうとするが、夏目のボケのような言葉についてツッコミを入れてしまった。

そんな会話の間、一つ目とニャンコ先生はというと……。

「せくはら?」

「知らんのか。セクシャルハラスメントの略だ」

こんな会話をしていた。夏目達を助ける様子はない。

「やめ……やっ……」

夏目はそこでなんとか妖怪達の猛攻を振り切ることができると同時に拳を握り、振り下ろす。ニャンコ先生の頭へと。

「やめさせろってんだ!このエセニャンコ!!」

その拳は、見た目はひよろい男で重いものが持てそうにもない姿をしている夏目からは想像も出来ない力でニャンコ先生へと振り下ろされ、ニャンコ先生はそこで沈む。そして夏目は夏目で息を整えずに拳を握ったまま妖怪達へと言葉を投げかける。

「はあ、はあ……次は、どいつだ」

妖怪達はそんな夏目の姿に怯え、距離をとった。

「はあ、はあ……というか、三日月、なんで、祓ってくれなかったんだ!」

「いや、お札使おうとしたら全てが終わってたから」

夏目の抗議の声に三日月は少し引き気味に答える。三日月も三日月で、今の夏目の姿は少し怖かったようだ。

と、そこでその場にいた全員が気づく。

離れたところから聞こえる音を。そして、何かの気配を。

「夏目君!」

「夏目、つかまれ!」

夏目が何かの気配の方へと向こうとした瞬間、本来の姿である斑らの姿へと戻ったニャンコ先生の声と、そのニャンコ先生に既に捕まっ

ていた三日月の手に引かれ、夏目は斑に乗ったまま高い木の上へと避難することができた。

「一体、何が……」

「高い霊力の者は清めの一波を放つことが出来るという。どっからか我々に向けて霊波が放たれたんだ。見ろ、下等な連中は見事に払われてる」

「……」

斑の言葉に三日月も下を見れば、確かに先ほどまで三日月達を攻撃して来た妖怪達は跡形もなくなくなっていた。

そのまま斑らは下の清められた原っぱに降り立ち、夏目とさやかも降りてその場に立った。

「清めの一波……皆、消されてしまったのか?」

「いいえ。怖がって逃げただけだよ。だから、安心して」

「そ、そうか……」

夏目はさやかの言葉に安心したのか体から力が抜け、四つん這いになつて息を長く吐いた。

「しかしここは清められ、下等連中はしばらく帰つて来れんのさ」

「居場所をおわれたつてことか……」

「そうね。それも、随分一方的な……」

そこでさやかは言葉を止め、力が飛んで来た方へと顔を向ける。その先に見えたのは、人の影。それも、見覚えのある――。

(……まさか)

さやかはそこである一人の和尚を思い浮かべ、考え込む。その後ろで、夏目が一つ目と牛、二匹の中級妖怪に胴上げされていることも知らずに。

その次の日の放課後。さやかは一人、八ツ原の寺に鈴も連れてやって来ていた。

「鈴は普通の人には見えないのが良いよね」

「そうね。それで?どうしてこの寺にやって来たのかしら?昨日の話に関係が?」

鈴は昨夜、さやかから昼の話を聞いていた為、昨日の放課後の出来事は全て知っている。

さやかは鈴の言葉に一つ頷き、声を掛けた。

「ごめんくださいーい。どなたか、いらっしやいませんか？」

さやかのその声はその場に響き、少しすると中から人が歩いてくる音が聞こえ、引き戸が横にスライドされる。現れたのは、眼鏡を掛けた和尚だった。

「はいはい。……おや、お若い方が何か御用でしょうか？」

「いえ。少し、お話を聞きに……昨日のお昼頃、もしかして八ツ原の野原でお祓いをしていましたか？」

「ええ。私の息子が少し敏感な子で、気休めですがこまめに清めて回っている次第です」

「なるほど……」

それにさやかは悪気はないのだろうと判断した。そう、悪気はないのだ。

「しかし、彼らも困っていて……」

「おや、どなたか困っているのですか？」

「……え？」

和尚の言葉に、さやかは固まった。

(……この人は、今、なんて……)

さやかは悟られないようにそっと横目で鈴を見る。その鈴はそれに気付くと、横に首を振った。その行動で理解する。

この和尚は、妖怪達が見えていない、と。

「……いえ、すみません。忘れてください」

さやかはそこで微笑みを向ける。その顔を和尚がジツと見ると、言葉を返す。

「……君は、見えるのかい？」

その和尚の言葉に、さやかは答えず、その場でお辞儀をして帰っていった。

同じ、八ヶ原の森にある、自身の屋敷へと。

その日の夜。

「……夏目レイコの孫に、伝えなくてよかつたの？」

鈴が食事を机に置きながら、外を静かに眺めているさやかに問いかける。そのさやかは鈴に顔を向けず、答えた。

「夏目君なら問題ないと思う。それに、斑も姿を見ていたし、伝えな
いってことはまあ、問題ないんだと思う」

「……そう」

鈴はそれ以上何も言わず、食事を机に置く作業を終わらせると、猫の姿に戻った。

「さ、ご飯も用意できたから食べましょう」

「……そうだね！」

さやかは鈴の言葉に笑顔を浮かべると、机に這いずるような形で向かいだす。

その翌日に三篠と出会い、和尚と出会うことをさやかが知ったのは、そのまた次の日であった。